

二〇一二年度秋季企画展

「早稲田大学創立一二三〇周年記念 大隈重信と小野梓―建学の礎展」

伊 東 久 智

二〇一二年一〇月二一日、早稲田大学はその前身である東京専門学校時代から数えて、創立一三〇年の節目を迎えることとなった。本展示ではそれを記念し、創立者である大隈重信と、その片腕として開校に力を尽くした小野梓の業績を「建学の礎」と位置づけ、二人の軌跡にあらためて光を当てた。会期は二〇一二年一〇月九日から一一月一〇日までの約一カ月間、会場は早稲田大学大隈記念タワー（二六号館）一〇階の「一二五記念室」であった（来観者は八九〇人）。

また、連携企画として、上記会期中、早稲田大学二号館會津八一記念博物館内の「大隈記念室」において、通常はレプリカを展示している大隈重信着用「緋のガウン」及び「遭難服」の実物を披露した。加えて、一月五日には井上琢智（関西学院大学）・五百旗頭薫（東京大学）・真辺将之（早稲田大学）の三先生をお招きし、講演会「建学の礎を見つめ直す―大隈重信・小野梓と東京専門学校」（於大隈記念講堂小講堂）を開催した（詳細は彙報欄をご参照いただきたい）。

展示資料については、坂本起一氏、国立国会図書館憲政資料室、宿毛市立宿毛歴史館、町田市立国際版画美術館、

2012 年度秋季企画展・早稲田大学創立 130 周年記念

大隈重信と小野梓

建学の礎展



2012 年 10 月 9 日 (火) ~ 11 月 10 日 (土)

開室時間：10 ~ 18 時

閉室日：日曜日・祝日 但し 10 月 21 日 (日)・11 月 3 日 (祝)・11 月 4 日 (日) は開室

会場：早稲田大学 26 号館大隈記念タワー 10 階 125 記念室

【連携講演会】

「建学の礎を見つめ直す—大隈重信・小野梓と東京専門学校—」

講師：井上琢智氏・五百旗頭真氏・真辺裕之氏

日時：11 月 5 日 (月) 14:45 ~ 17:00

会場：早稲田大学大隈記念講堂 小禮堂

申込不要・聴講無料

【大隈記念室 連携展示】

大隈重信着用 遺離服・緋のガウン

複製はレプリカを展示していますが、会期中は実物を展示します

展示期間：2012 年 10 月 9 日 (火) ~ 11 月 10 日 (土)

開室日：日曜日・祝日 但し 10 月 21 日・11 月 3 日・11 月 4 日は開室

時間：10 ~ 17 時 10 月 21 日・11 月 3 日・11 月 4 日は 16 時まで (入館は 30 分前まで)

会場：早稲田大学 2 号館會津八一記念博物館内 大隈記念室

早稲田大学 学史資料センター

(問合せ)

TEL: 03-5286-1814

e-mail: archives@list.waseda.jp

(大学史) <http://www.waseda.jp/archives/>

(文化遺産部) <http://www.wasedabunka.jp/>

展示会ポスター



大隈重信肖像

明治政府高官時代 早稲田大学大学史資料センター所蔵



小野梓肖像油彩

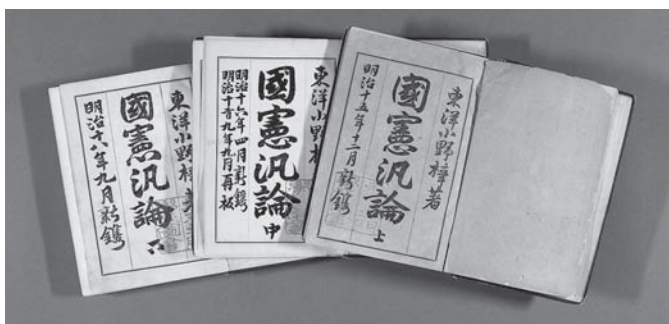
作成年代不詳（岡吉枝画） 早稲田大学會津八一記念博物館所蔵



小野梓自筆「留客齋日記」

1879（明治12）年1月～1885（明治18）年10月 坂本起一氏所蔵「小野梓関係文書」（国立国会図書館憲政資料室寄託）

首巻から六巻までに分冊（和綴本）された小野の日記である。その初めに「考祖・先考、共に其日記ありて我々子孫を利するもの太多し。其事後人倣ふべし。是れ余の之を作る所以なり」と記し、一部中断を挟みつつも、死の前年まで書き継がれた。当初は平仮名まじり文、1881（明治14）年以降は漢文体である。



小野梓著『国憲汎論』上・中・下巻

1882（明治15）年～1885（明治18）年 早稲田大学図書館所蔵

小野がその国家・憲法構想を11年の歳月を費やしてまとめ上げた畢生の大著。1882（明治15）年12月に上巻、83（明治16）年4月に中巻、85（明治18）年9月に下巻がそれぞれ発行され、題字は小野自身の手に成る。反響の大きさは、後に中国でも漢訳版が刊行されたという事実によって知られる。

早稲田大学図書館、同會津八一記念博物館のご協力を得た。ここにあらためて深謝申し上げたい。

なお、本展示においてはパートⅠを木下恵太、Ⅱを伊東久智、Ⅲを檜皮瑞樹がそれぞれ担当し、全体を伊東が統轄した。

Ⅰ 大隈重信と小野梓の出会い

1 明治政府の高官として——大隈重信

一九世紀末、欧米列強の力が極東に浸透し、日本の独立が脅かされる中で、明治新政府は一日も早い近代化の達成に迫られていた。こうした中で、佐賀藩士・大隈重信は幕府倒壊直後より外国事務局判事として登用され、薩長を中核とした新政府内でもたちまち頭角を現した。

大隈は任官してよりわずか一年内外で、会計官副知事、大蔵大輔（大蔵省の次官）に登り、一八七〇（明治三）年には参議、一九七二（明治五）年には大蔵卿を兼任した。大隈は薩摩の大久保利通、長州の伊藤博文らとともに新政府の中心となり、急速な欧米流の近代化を目標として、殖産興業政策や「大隈財政」とも称される通貨・会計・経済制度の改革を強力に推進した。

しかし、これら「欧米の新智識を要する事業」において、大隈の意図を解し、その手足となって補佐する人材が必要であった。薩長の政治家とは異なり、大隈は旧幕臣や慶応義塾出身者らを積極的に登用したが、欧米の思想・文物・制度に精通し、進んでこれを応用できる俊英が何より求められていた。

こうした大隈の前に現れたのが、米英留学から帰国していた若き小野梓であった。覇気にあふれ、「その俊傑たる

は一見その面容に表れて居た」という小野こそ、大隈が望んでやまなかった人物そのものであった。

【展示資料】

小野粹著「大隈公政略紀」

早稲田大学図書館所蔵

小野による大隈重信の評伝である。大隈の佐賀藩時代から明治政府初期における活躍につき、小野の評価を知ることができる。小野は資料を集め、大隈より聞き取りをしながら、一八八二(明治一五)年一二月より執筆を開始したが、惜しくも未完に終わった。

英国大使館旧蔵幕末維新対英外交文書

一八六九(明治二)年 早稲田大学図書館所蔵

幕府が倒壊した後、大隈は長崎において新政府の会議所に出仕し、わずか十か月ほどで外国官(現外務省)の次官に当たる副知事に任命された。展示文書は東久世通禧とともに大隈がイギリス公使に宛てた書簡の原本で、珍しい大隈の花押が見られる。

参議大隈重信褒状

一八七二(明治五)年一〇月二五日 早稲田大学図書館所蔵

一八六九(明治二)年、大蔵大輔・民部大輔となった大隈は、少輔の伊藤博文と組んで、鉄道創設を推進した。本

褒状には「(貴殿は)物議紛紜を顧みず定見を確守し」とあり、当初は鉄道建設への反対が熾烈だったことを物語っている。

東京汐留鉄道館蒸気車待合之図

一八七三(明治六)年 早稲田大学図書館所蔵

「汐留」とは現在の新橋のことで、大隈・伊藤が推進した最初の鉄道は新橋・横浜間に敷設された。もともと、大隈は政府部内における厳しい批判のため、鉄道開通当時にはすでにその管轄から外されていた。

上州富岡製糸場之図

一八七三(明治六)年 早稲田大学図書館所蔵

富岡製糸場は一八七二(明治五)年、群馬県に建設された官営模範工場である。フランスの技術を導入した大工場であったが、大隈の建設尽力に対して、やはり褒状が贈られている。大隈には同時に新工場の写真も贈られたが、こちらの方は惜しくも散逸した。

紙幣寮彫刻局石版部「大日本貨幣図」

一八七六(明治九)年二月 早稲田大学図書館所蔵

大隈は江戸時代以来の複雑な通貨制度を全廃し、近代的な円貨の制度を導入する上で、大きな役割を果たした。大隈・造幣寮(現独立行政法人造幣局)の建設において、中心となったのも大隈である。なお、本資料には「大隈氏蔵書記」

との朱印が押されている。

2 明治政府の新進官僚として——小野梓

小野は一八五二（嘉永五）年、土佐国宿毛（すくも）で生まれた。勉強がきらいで、塾ではよく夕方まで居眠りをしていたが、一三歳のころ猛勉強をはじめ、たちまち優等生として名を知られるようになった。

時代が明治に入ると、同郷の先輩小野義真の支援により米・英に留学、そこで近代欧米の思想や法律の原理をつぶさに学び、一八七四（明治七）年二二歳の時に帰国した。小野はその知見をもとに「共存同衆」を組織し、先進的な学術・文化を社会に紹介するとともに、司法省に就職して官僚としての第一歩を記した。しかし、一方で小野は薩長中心の政府の在り方に強い憤りを感じていた。

一八八〇（明治一三）年三月、小野は参議であった大隈の斡旋により、新設の会計検査院に移ると、ようやく自らの活躍の場を見出すこととなった。二等検査官に昇進した小野は翌年、政策意見書を大隈に送ると同時に、次のような心情を自ら大隈に訴えた。「蘭台の諸老多く在りと雖も 能く鄙言を聴くはただ君有るのみ」——朝廷の大官は多いとはいえ、私の意見を聞き入れるのは閣下一人あるのみである——。

大隈を知己とたのむ小野は自ら進んでその参謀となり、それにより自らの理想とする政治の実現を志すようになった。そして、この二人の出会いと共鳴は、また同時に東京専門学校（現早稲田大学）創設の淵源ともなった。

【展示資料】

小野梓書「羅馬懷古」詩軸

早稲田大学図書館所蔵

「七丘起伏斜陽 落木秋高古政堂 如何自主精神老 無限江山屬帝王」

（訓読）七丘の起伏斜陽を帯ぶ 落木秋は高し古政堂 如何ぞ自主の精神老い 無限の江山帝王に属せる

（語釈）ローマのなだらかな七つの丘には、夕日が差してきた。落葉した木々、議事堂の遺跡には、澄んだ秋空が広がっている。しかし、いったいなぜだろうか——自主独立の精神が衰え、無限の山河が専制君主に奪われてしまつたのは。

小野はイギリスでの勉強中リユーマチに苦しみ、イタリアに転地療養した。「羅馬懷古」は「中秋来因（ライン）河を下る」に「該撤（カエサル）の墓に謁す」と同様、そこで作成された詩であろう。

文集「東洋詩文」の方には「古政堂とは共和政治の時、政事を公議せる所なり」という自注が付けられており、小野は本詩において、古代ローマの政治が「公議」より皇帝専制に移行したことを哀惜している。

小野梓「論通常之教養」『共存雑誌』第一号

一八七五（明治八）年一月 早稲田大学図書館所蔵

小野の称する「通常之教養」とは、専門的な学識に対する基礎的な科学知識のことである。一般庶民における知識の普及こそ「差人議政」（選挙による政治）の根幹であると指摘し、英語や漢語を廃したかな文字単用による基礎教育

の実施を主張した。

小野梓「誰言国会之開設尚早乎」『共存雜誌』第六〇号

一八八〇（明治一三）年三月 早稲田大学図書館所蔵

一八七六（明治九）年に作成された論文である。小野は当時の国会開設尚早論を取り上げて反駁し、逆に国民に参政権を与えることにより、封建的な「属隸」心を克服し、「自治の精神」とその政治的能力を発達させるべきであると主張した。

小野梓草稿「利学入門」

一八七八（明治一）年一月 早稲田大学図書館所蔵

小野はイギリスのベンサムが唱えた「最大多数の最大幸福」——少数の特権者ではなく多数の国民が利益を得る政治・社会のあり方——に象徴される功利主義を信奉していた。小野はこれを仏教の理念をも借りて「真利」と表現し、自らの思想的基盤としていた。

小野梓著『民法之骨』上篇

一八八四（明治一七）年二月刊 早稲田大学大学史資料センター所蔵

小野にとって、民法の研究は憲法と並んで重要であった。一八七五（明治八）年春より本書の執筆を開始し、九年後に上篇を刊行したが、結局未完に終わった。しかし、一国の基礎は家族ではなく独立した個人にあること、法的に

家族を支配する戸主の制度は不当であること等、現行民法に通じる先駆的主張が見られる。

小野義真肖像写真 ※パネル展示

原写真 は 宿毛市立宿毛歴史館所蔵

小野義真（一八三九～一九〇五）は小野梓の同郷の先輩で、妹の利遠は小野梓の妻である。小野梓の留学から書店経営まで、終生にわたりその活動を支援した。また、三菱会社に入りその基礎を築いたほか、日本鉄道会社（現東北本線・高崎線等）の創設に尽力した。

官員高名録 ※パネル展示

一八八〇（明治一三）年三月 早稲田大学図書館所蔵

一八八〇年三月頃の政府高官の人名表である。右側最上段一人目に大隈、左側下から二段目左から七人目に「法制」官として小野の名が見えている。

なお、ちょうどこの三月に法制局が廃止され、小野は直ちに官吏辞職を決意したが、大隈の慰留により会計検査院へと移ることとなった。

大隈重信「小野梓君追懐談」『早稲田学報』第一五七号

一九〇八（明治四二）年三月 早稲田大学図書館所蔵

一九〇八年二月に行われた「故小野梓先生追悼会」のため、大隈が寄せた小野についての回想談である。小野は帰

国当初大隈とは縁遠い法制官となったので、多少大隈の記憶違いもあるが、当事者が語った二人の出会いの様子としてかけがえのない資料である。

会計検査院章程案並会計法案

一八八一（明治一四）年三月 早稲田大学図書館所蔵

一八八〇（明治一三）年三月、参議であった大隈の主唱により会計検査院が設置されると、小野はその検査官となり、名実ともに大隈の側近として活躍するようになった。本章程案・会計法案も大隈の名で上申されているが、案文起草したのは小野であり、いわば兩人の合作であった。

Ⅱ 疾走の二年間——「明治一四年の政変」から東京専門学校創立まで

1 大隈と小野、朝衣を解く——「明治一四年の政変」

大隈の知遇を得て会計検査院に奉職した小野は、水魚の如く颯爽と政官界を泳ぎはじめる。一八八一（明治一四）年三月には「今政十宜」と題する政策意見書を大隈に提出し、大隈が時勢の赴くところを語れば、小野は政治方針の不定を痛論する、そうした濃密な時間を共有するまでになっていた。しかし大隈が時を同じくして上呈した意見書は、イギリスにならった政党内閣制の採用と二年後の国会開設を主張する「意外之急進論」（伊藤博文）であり、政府部内（薩長勢力）には衝撃が走ることとなった。

ほどなくして北海道開拓使官有物払い下げ問題が世情を賑わしはじめると、小野は「卓然不動」とした対応を大隈

に求めつつ、自らは検査官の意思を統一し、払い下げを非とする上書の提出に向け動きはじめた。それと同時に、この問題を利用して一挙に憲法の制定を実現しようとする戦略・戦術プランを練り、ちよūdō天皇の東北・北海道巡幸に供奉していた大隈に送るなど、策士としての一面も垣間見せた。

しかし、伊藤をはじめとする薩長勢力は、払い下げ問題の煽動者と目した大隈の罷免をすでに決意しており、一月一日、それを実行に移した（いわゆる「明治一四年の政変」）。払い下げの中止、憲法制定・国会開設は約束されたものの、小野の構想は日の目を見ることなく破られ、彼もまた大隈に従って二二日に辞表を提出した。

【展示資料】

小野梓詩書「待花」

一八七八（明治一二）年初筆 早稲田大学図書館所蔵

「欲暖猶寒節序遅 朝々屈指数花期 花期未到意先到 為賦墨江春色詩」——憲法の制定と国会の開設、すなわち立憲国家の完成を渴仰する想いを、春を前に花を待つ心持ちに擬して詠んだ詩。後、大著『国憲汎論』上巻（二八八二年二月）の巻首にも掲げられた。

先考自筆大隈侯上奏文写（参議大隈重信国会開設意見書）

一八八一（明治一四）年三月 国立国会図書館憲政資料室所蔵「伊藤博文関係文書」

天皇の諮問に応じて作成されたもので、全七項目より成り、その主眼は国会の早期開設（一八八三年初めの開設）とイギリス流の議院（政党）内閣制の採用を主張することにあつた。これは六月二七日に意見書を内覧し、その急進性

に大きな衝撃を受けた伊藤博文による筆写史料。

小野梓自筆「今政十宜」

一八八一（明治一四）年三月一八日提出 早稲田大学図書館所蔵

会計検査官として参議・大隈との関係を深めていった小野は、抱懐する意見を積極的に大隈に働きかけてゆく。これはその名が示す通り、一〇箇条から成る政策意見書である。そこで小野は、内閣組織の変革⇨政党内閣制の採用を筆頭に掲げ、後に政治問題化することとなる北海道開拓使の廃止を建言するなどしている。

大隈重信宛小野梓書翰

「一八八一（明治一四）年」九月二十九日 早稲田大学図書館所蔵

政変の直前、小野は義兄・小野義真にこの書を託し、明治天皇の東北巡幸に随行中の大隈に対して中央政局の動静を報じた。文中、「公明之議」に就き、「卓然不動」として「我日本を無政府之不幸」から救って欲しいと要望するとともに、小野自らも「此際正義の爲め閣下の爲め死力を出し、閣下と其浮沈荣辱を共にし奉る決心」であると訴えている。

若我自当

一八八一（明治一四）年一〇月七日 坂本起一氏所蔵「小野梓関係文書」（国立国会図書館憲政資料室寄託）

前掲書翰中において、近く提出するとされていた「鄙見」が、この「若我自当（若し我自ら当たれば）」である。執

筆中、小野は初めての咯血を経験。まさに心血を注いだ意見書であった。

その中で小野は、「第一劇」として開拓使官有物払い下げの非を争い、「第二劇」としてそれを「方便」として一挙に憲法の制定を実現させるべきとして、具体的な戦術を開陳している（大隈には使者の手を通じて一〇月九日に届けられた）。

なお、本史料は他史料からは欠落している八〇〇字余りの加筆——「第三の一劇」として憲法制定の順序、行政の整理、皇室財産設定の問題を扱っている——を含む異稿（前半部分欠）であり、原稿「商況論」の紙背に記されている。

2 片手に政党、片手に学校を掲げて

（1）改進は天地の大道なり——立憲改進黨の結成

政変に先立つ一八八一（明治二四）年の春から夏にかけて、小野はすでに彼に私淑していた小川為次郎（統計院官吏）や高田早苗（東京大学在学中）らとともに「中立政党」樹立に向けた協議を開始し、九月二五日には討論の末、その主義を「真利」に求めることとしたと日記に記している。そうした水面下の動きは、政変を境として一気に具体性を帯びながら加速してゆく。野に下った大隈と小野は、この政党樹立を通じて、いったん失われた自らの立脚地を定め直すとしたのである。

年が改まった一月三十一日、雉子橋の大隈邸に開かれた会議において、小野は党の核心であるところの規約・宣言の起草を担うこととなり、翌月には「立憲改進黨」という党名も定まっている。しかも、小野は「施政ノ要義」といったより詳細かつ実際的な党の方針書をも立て続けに著し、それらは逐次大隈の供覧に付されている。

そして政変から約半年後の一八八二（明治一五）年四月一六日。立憲改進黨の結党式が挙行され、大隈は総理、そ

して小野は掌事（幹事）に選出された。以降、小野は文字通り寸暇を惜しみつつ中心的に党務を担うとともに、党勢拡張のため精力的な遊説活動などにも従事することとなる。

【展示資料】

小野梓自筆「何以結党」

一八八一（明治一四）年二月一六日 早稲田大学図書館所蔵

政変から間もない一二月、小野はすでに政党——立憲改進黨の結成準備に着手していた。「何以結党」は、その主義とするところを列挙・成文化した意見書であり、一七日に大隈に手交された。その後半部に付された「我党の大主義を告示する文案」は、やがて改訂を経て、改進黨の趣意書として公表されることとなる。

小野梓自筆「施政ノ要義」 ※パネル展示

一八八二（明治一五）年二月六日浄書 早稲田大学図書館所蔵

改進黨の「宣言」「規約」とともに起草されたいわば党の政策大綱案である。政党内閣制の採用、皇室財産の造成、紙幣制の廃止など、一三項目にわたる具体的な内容を備えており、結局日の目を見ることはなかったものの、小野独自の構想を窺うことのできる好史料といえる。なかでも「学問の独立」について述べた箇所は、東京専門学校創設へと連なるという意味においてとりわけ興味深い。

尾形月耕画「廿三年の未来記」

一八八三（明治一六）年五月 早稲田大学大学史資料センター所蔵

政変の結果、政府は明治二三（一八九〇）年に国会を開設することを公示した。この錦絵は、その暁の姿を想像した「未来記」である。福沢諭吉を中心に、大隈重信、板垣退助、福地源一郎（桜痴）など、各党派首・幹部が真剣な眼差しで議論を戦わせている。

小野梓書「改進黨者天地之大道」

「一八八三（明治一六）年二月カ」 坂本起一氏所蔵「小野梓関係文書」（国立国会図書館憲政資料室寄託）

新潟・長野遊説の際に求められて書したものと考えられる。

（2）一国の独立は学問の独立より——東京専門学校創立

大隈と小野が政党——立憲改進黨——の結成とともに重視したのが、後進の教育・育成、すなわち学校の創立であった。政党と学校。それは車の両輪として位置づけられており、もともと大隈の胸中にはその構想があったというが、これも動きが本格化したのは政変後のことである。ここでもやはり、実務遂行上の中心を担ったのは小野梓であった。

さらにそこには、小野を敬慕し、また大隈の理念に共鳴する七人の若者——高田早苗・天野為之・市島謙吉・山田一郎・砂川雄峻・岡山兼吉・山田喜之助——も馳せ参じた。いまだ東京大学に在学中（一八八二年七月卒業）であった彼らは、小野を囲んで「鷗渡会」（小野邸近くの「鷗の渡し」に因む）を結成し、改進黨の結党過程にも深く関与していた。大隈と小野、そして鷗渡会の七人組。この三者を、大隈は後に「三角同盟」という言葉をもって表現しているが、至

言といえよう。

小野の日記を見ると、学校の創立準備は七月頃から急ピッチで進められたことが分かる。当初「早稲田学校」あるいは「戸塚学校」などと表現されていた校名は八月下旬までには「東京専門学校」と決まり、約一ヵ月後には開校を公告、すぐさま入学試験を実施、そして一〇月二日には開校式という慌ただしさである。しかし「三角同盟」は、党務に忙殺されながらもそれを万遺憾なくやり遂げた。

創立の第一人者である大隈は、反政府分子の養成所であるとの曲解を避けるため、開校式には姿を現さなかった。しかしその想いを代弁するかように、小野は熱誠に溢れた一場の演説を打つ。そこで披瀝された「大学」への発展を目指す決意、そして「学問の独立」という建学の理念は、やがて早稲田大学という形で実を結び、今日に受け継がれている。

【展示資料】

小野梓自筆「祝東京専門学校之開校」

一八八二（明治一五）年一〇月 早稲田大学図書館所蔵

一八八二（明治一五）年一〇月二二日、東京専門学校の開校式が挙行された。現在へと連なる早稲田大学の歴史が幕を開けたその日、小野は壇上に立ち、建学の理念となった「学問の独立」を、高らかに、かつ熱誠ほとばしる勢いをもって宣言した。これはその記念碑的演説の草稿である。

余は本校に向て望む、十数年の後ち漸くこの専門の学校を改良前進し、邦語を以て我が子弟を教授する大学の

位置に進め、我邦学問の独立を助くるあらんことを。顧みて看れば、一国の独立は国民の独立に基ひし、国民の独立は其精神の独立に根ざす。而して国民精神の独立は実に学問の独立に由るものなれば、其国を独立せしめんと欲せば、必ず先づ其民を独立せしめざるを得ず。其民を独立せしめんと欲せば、必ず先づ其精神を独立せしめざるを得ず。而して其精神を独立せしめんと欲せば、必ず先づ其学問を独立せしめざるを得ず。

※平仮名表記に改め、句読点を補いました。

小野梓書「採公議而為政」「隨輿論而布治」

一八八二（明治一五）年秋 早稲田大学図書館所蔵

東京専門学校創立の頃記されたもので、政治の立脚点を公議・輿論に求めよとの意（公議を採りて政を為し 輿論に随ひて治を布く）。

大隈重信宛小野梓書翰

「一八八三（明治一六）年一月二二日」 早稲田大学図書館所蔵

一八八三（明治一六）年一月、小野は立憲改進黨の党勢拡大を図るため、新潟・長野方面に遊説した。この書翰はその途次、新潟の旅宿から県下の政情や遊説の様子を大隈に報告したもの。「板垣漫遊後殆んど概して自由党に帰し」という新潟においても、遊説はことごとく成功し、この勢いで行けば「越後を経略」することも難しくはないと誇っている。

III 初期東京専門学校と小野梓の死

1 学苑の危機と小野梓

大隈重信の資金的援助と小野梓の情熱によって開学した東京専門学校であったが、創設からの数年間は教員の確保や資金難、その背後にあった政府の妨害によって苦難の連続であった。

設立当初、学費による学校収入はごく僅かであり、創立資金だけでなく初期専門学校の運営資金の大半は大隈からの「個人的」支援に依存していた。一方、大隈も明治一四年政変による下野後は無収入であり、資金難の状態であった。

このような状態に拍車をかけたのが政府によるさまざまな妨害工作であった。一八八三（明治一六）年二月には判事・検事・東京大学教授の私立法律学校への出講が禁止され、東京専門学校をはじめとした多くの私立学校は教員確保に苦難することとなった。

また、政府は銀行等に圧力をかけ、大隈への資金融資を制限した。そのため、大隈は一八八四（明治一七）年に姪子橋（麹町区飯田町）の自宅を売り払い、早稲田の別邸を自宅とし居を移すことで資金を確保するなど、資金難への対応に苦慮した。講師達も一八八四年五月以降、給料の一割を天引きし学校に寄付するなど、まさしく「奉仕的精神」によって学校運営をかううじて維持するような状態であった。

このような事態を打開するため、岡山兼吉によって提起されたのが学苑の神田地区への移転計画であった。この移転案は英吉利法律学校との合併による「一大私立英法系法律学校」をも視野にいった構想であったが挫折し、一八八

五（明治一八）年に岡山と山田喜之助は学苑を去ることとなった。また、山田一郎は停滞する法律学科の廃止論を提起し、小野梓も一度は廃止論に傾いたが、大隈の決断によってその存続が決定された。岡山と山田喜之助は、小野梓とともに鷗渡会のメンバーとして東京専門学校創設に関わったが、僅か三年で袂を分かつこととなった。

このような初期東京専門学校が経験した多くの困難に対して、学校創設者大隈重信が表だって学校運営に関わることで困難な状況のなかで、学校運営の実質的な中心人物として奔走したのが小野梓であった。

【展示資料】

大隈重信宛小野梓書翰

〔一八八三（明治一六）年〕八月二八日 早稲田大学図書館所蔵

東京専門学校創設以後、学校運営において中心的役割を果たしたのが小野梓であった。本書簡では、学校校舎の増築や入学者数の増加などを大隈に報告している。

小野梓自筆「留客齋日記」

一八八四（明治一七）年四月一日の頁 坂本起一氏所蔵「小野梓関係文書」（国立国会図書館憲政資料室寄託）

開校後の学苑は数々の危機を乗り越えた。本資料中には、大隈邸での学校関係者との会合において、小野が学校会計を建て直すために経費削減を速やかに実行することを提起したことが記されている。

探聞（東京専門学校生徒臨時退校ノ件）

一八八七（明治二〇）年四月四日 国立国会図書館憲政資料室所蔵「三島通庸関係文書」

政府は東京専門学校を「謀反人の学校」として警戒した。学校内に密偵が忍び込み、それに気付いた学生とのトラブルが頻発したが、在校生の回顧録などにも登場する。本史料は、牛込警察署勤務・巡査白石義正が作成した探聞であり、東京専門学校学生の政治集会への参加が報告されている。この史料が当時警視総監であった三島通庸の手許にあったことは、警察を通じて政府が東京専門学校を監視していたことを示唆するものである。

大隈重信宛小野梓書翰

「一八八五（明治一八）年」六月五日 早稲田大学大学史資料センター所蔵

一八八五（明治一八）年六月の議員会で岡山兼吉の学校移転案は否決されたものの、山田一郎による法律学科廃止案が新たに提起された。本書簡には「一時法学部を中止し専ら力を政治英学之二目に用」と、小野梓も法律学科の一時停止に傾いていたことが記されている。

2 駆け抜けた生涯——小野の死去と専門学校

改進黨結党、東京専門学校創設から死去までの四年弱の期間、小野梓は生き急ぐようにその生涯を駆け抜けた。改進黨幹部としての政治活動や東京専門学校の実質的運営者としての活動の他に、東洋館書店の設立や『国憲汎論』『民法之骨』『日本財政論』の執筆など、まさしく八面六臂の活躍であった。

一方、多忙を極めた活動は確実に小野梓の身体を蝕んでいた。一八八四（明治一七）年四月に吐血した小野は、そ

の後も吐血を繰り返して床に臥すことが多くなった。一八八五（明治一八）年には外出することも困難になり、執筆活動に専念した。しかし、小野の容態は改善することなく、翌一八八六（明治一九）年一月一日、神田錦町の自宅で三三年と一〇カ月の生涯に幕を閉じた。

小野梓の死去は、東京専門学校関係者にとって衝撃であり、学校運営にとって小野を欠くことは最大の危機でもあった。また、その死の直後から、小野梓の死を悼み、彼の業績を顕彰する活動が活発に行われた。

【展示資料】

大隈重信宛小野梓書翰

〔一八八四（明治一七）年一〇月一日〕 早稲田大学図書館所蔵

小野梓にとって最期の二年間は病魔との闘いでもあった。本書簡でも吐血の様子と体調を大隈に報告している。

大隈重信宛小野梓書翰 附借用証

一八八五（明治一八）年一月九日 早稲田大学大学史資料センター所蔵

晩年の小野梓は外出もままならず、また東洋館書店の運営資金など金銭的にも困窮していた。そのため、政敵であった伊藤博文や袂を分かった岡山兼吉にも借金を申し込んでいる。書簡は大隈からの一五〇円の借用金に関する礼状と借用証であり、死去のわずか二カ月前の書簡である。

山田一郎著『東洋小野梓君伝』

一八八六（明治一九）年二月 早稲田大学図書館所蔵

小野梓の死と葬儀の模様を報じた『中央学術雑誌』第二一号（一八八六年一月二五日）の附録として刊行されたもの。
小野に師事し、鷗渡会メンバーでもあった山田一郎によつて執筆された。

小野梓君碑（拓本） ※パネル展示

一八八七（明治二〇）年五月建碑 早稲田大学図書館所蔵

中村正直撰文、大内青巒書、宮亀年刻、大隈重信篆額。小野梓の郷里である高知県宿毛の清宝寺境内に建てられた。

故小野梓氏建碑金義捐者姓名及会計報告

「一八八七（明治二〇）年頃」 坂本起一氏所蔵「小野梓関係文書」（国立国会図書館憲政資料室寄託）

宿毛に建立した「小野梓君碑」の義捐者及び会計報告書。尾崎行雄、岡山兼吉、高田早苗、大隈英麿、島田三郎等
一六人が発起人として名を連ねている。

3 教員小野梓と学生

小野梓は多忙な政治活動の合間を縫って教壇に立ち続けた。病身に鞭打つように、正規の授業では「日本財政論」を、科外講義では「国憲汎論」を講義した。また、学生団体である同攻会の演説会にも積極的に参加し、学生に対して情熱的に語りかけた。

学生も新進気鋭の青年政治家小野梓をはじめ、高田早苗、天野為之、坪内逍遙など二〇代前半の青年教師の講義に熱狂した。学生達は、教師から単に学問を摂取したのみならず、彼らを通じて現実の政治に直に触れることが出来たのであった。

【展示資料】

広井一著「私の在学した頃」『早稲田学報』第四〇五号

一九二八（昭和三年）一月 早稲田大学史資料センター所蔵

広井一は一八八五（明治一八）年政治学科卒業、新潟県古志郡小栗山村（現在の小千谷市）出身、『越佐毎日新聞』主筆や『北越新報』社長などをつとめた。本史料では、「教壇に立たるるや、雄弁滔々口を突いて出て、学生をして思はず快哉を叫ばしめられた」と、小野梓の講義を受けた学生達の興奮する様子を回想している。

市島謙吉著『文墨余談』

一九三五（昭和一〇）年八月 早稲田大学図書館所蔵

小野梓の盟友である市島謙吉による回想。「講義であるから拍手喝采は禁物であるのだが、先生の雄弁は学生をして不知不識禁を犯して先生に叱られたことを思ひ起す」と、学生達が小野の講義に対して拍手喝采し、小野が学生をたしなめた風景を懐かしんでいる。

〔草稿〕（国憲汎論 下巻）

一八八五（明治一八）年頃 坂本起一氏所蔵「小野梓関係文書」（国立国会図書館憲政資料室寄託）

一八八五年九月に刊行された『国憲汎論』下巻の草稿。朱書で多くの箇所修正・加筆が入られている。三七・三八章「司法官ヲ細論ス」、第四章「会計ノ事ヲ論ス」、四六章のみ現存する。

堀内七十郎自筆「懷中日記」

一八八四（明治一七）年 早稲田大学大学史資料センター所蔵

堀内七十郎は一八八五（明治一八）年邦語政治科卒業、長野県埴科郡粟佐村（現在の千曲市）出身、前掲広井一は同級生。七月一九日の頁には「本日同攻会演説アリ、演者坂井和知宗方辻岸及小野梓氏等ナリ、小野氏條約改正論ヲ演シテ、人ヲシテ感激セシム」と、同攻会演説会で小野梓が「条約改正論」を論じたこと、その内容に感銘した様子が記述されている。

小野梓著「条約改正論」（写本）

一八八四（明治一七）年頃 早稲田大学図書館所蔵

「条約改正論」は小野梓が一八八四（明治一七）年五月一三日から三〇日にかけて執筆した。許可が出なかったため実際には出版されていない。井上馨外務卿による条約改正交渉に対する、自由民権運動からの意見書のひとつである。「条約改正論」のオリジナルは井上馨に提出され、現在は国立国会図書館「井上馨関係文書」中に含まれる。本史料はその筆写本である。



展示会風景（早稲田大学大隈記念タワー10階125記念室）